

國學院大學學術情報リポジトリ

「共育」における学生の学びの実態と課題(2) :
地域と連携した学びの共同体づくりに向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小笠原, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001272

「共育」における学生の学びの実態と課題Ⅱ

～地域と連携した学びの共同体づくりに向けて～

小笠原 優子

【キーワード】

共育 社会体験的な実習 地域連携 教育インターンシップ 子ども理解

1. はじめに

國學院大學人間開発学部設置されている「教育実践総合センター」の役割は、社会体験的な演習・実習等を通した大学と地域社会の連携による「共育」の実践を行い、地域に育てられ地域と共に育つ人材の育成（人間開発学部の目的（3））することである。¹⁾

拙稿²⁾にも述べたように、これまでに教育実践総合センターでは、「教育インターンシップ」などの教科科目の支援を行ったり、学内外の関係機関との連携のもとに教育に関する理論的・実践的研究および指導に関わったりしてきた。

前掲拙稿では、「教育インターンシップ」3年間の実施状況と学生の学び・成長について学生の活動とその振り返りの感想とを関連付けて「『共育』における学生の学びの実態と課題」を述べた。また、人間開発学部教育実践総合センター主催の夏季教育講座、教育ボランティア等、地域教育機関等との連携の視点も踏まえて「『共育』における学生の学びの実態と課題」を述べた。本稿では、「教育インターンシップ」の4年間の実施状況と学生の「教育インターンシップ」に関する学びを関連付けながら、またその学生の学びの状況について学生の記録を中心に関係付けながら「『共育』における学生の学びの実態と課題」を述べていきたい。学生の学び・成長の視点として、学生が記述した活動記録やレポートから見られる記録を整理し、実際の受入校訪問指導の際の学生の状況と関わらせて振り返りたい。

さらに、人間開発学部一期生（平成25年3月卒業）の聞き取りを整理してまとめ、現在教員として学校現場で教壇に立つ一期生の聞き取りから見えてくる教育現場の実態とも関わらせ、地域と連携した学びの共同体づくりに向け、「『共育』における学生の学びの実態と課題」を探っていきたい。

2. 人間開発学部における教育インターンシップ4年間の実施状況

本学部の「教育インターンシップで」では、授業のテーマを「地域諸学校との連携による実践体験型実習³⁾」としている。また、本学の「教育インターンシップ」の主な目的は、「①子どもたちとの交流を通して体験的な「子ども理解」を促進すること。②教育現場の日常的業務や教育

の仕事についての理解を深めること。」としている。

本学部では、「教育インターンシップ」実施前の平成21年度に「教育ネットワーク会議」を立ち上げ、近隣校（横浜市立の新石川小学校、鴨志田第一小学校、元石川小学校、山内小学校、山内中学校）における学生の教育ボランティアの活動が始まり、平成22年度から「教育インターンシップ」の授業を開講し、平成25年度に4年目をむかえた。なお、平成26年度は、本学部において平成25年度に新設された「子ども支援学科」が2年目を迎え、平成26年度に「教育インターンシップ」が開始される予定である。

「教育インターンシップ」にかかわる学生の人数は下表の通りである。

「教育インターンシップ」にかかわる学生の人数の変化

年 度	初等教育学科	健康体育学科	計
平成22年度	79名(90.8%)	8名(9.2%)	87名
平成23年度	66名(82.5%)	14名(17.5%)	80名
平成24年度	74名(86.1%)	12名(13.9%)	86名
平成25年度	68名(81.0%)	16名(19.0%)	84名

「教育インターンシップ」にかかわる学生数は、平成25年度は計84名となっている。例年通り、初等教育学科の学生に比べ健康体育学科の学生数が少ない。全体からみた健康体育学科学生の割合の経年変化をみると平成22年度の9.2%、23年度の17.5%、24年度13.9%、25年度の19.0%という状況であり、今年度は最も高い割合となっている。

平成25年度の健康体育学科の学生の状況については、2年生12名、3年生4名であるが、例年、後期に入ってから「教育インターンシップ」希望の相談に来るケースがあり、上表の数値には入らないが、教育ボランティアという形で活動を開始する学生も見られる。教職を目指す意識と履修の関係にはつながりがあるが、健康体育学科の学生のケースでは、教職を目指す意識を持つ時期と履修登録時期とのずれが見られ、毎年、学生の希望を実現するための個別対応が必要となっている。

前掲拙稿では、年度を経るに従い、学生一人の平均活動時間の増加、教育インターンシップ終了後の活動の継続の増加が見られることを指摘した。教職を目指す意識が学生それぞれで異なり、社会体験的な実習をいくつも経験した上で進路を決定したいという要求から、複数の校種、複数の地域での活動を希望するケースが増加している。

平成23年度以降は、出身校で教育インターンシップの実習を行う学生の数が増加している。平成25年度「教育インターンシップ」履修者のうち、「教育インターンシップ」実習校と「教育実習」予定校が一致するのは、東京都以外の小学校で実習する学生44名のうち25名となり、56.8%を占めている。22年度履修者の58名中15名（25.9%）と比較すると大きな変化が見られる。

また、「教育インターンシップ」から継続した教育ボランティア活動、教育実習とつなげていくケー

書き方として指示している3つの項目の「子どもへの理解について」「教師の仕事について」「学校という場について」、学生が記述したレポートにまとめられた文言の傾向を下記に示す。

① **子どもへの理解**

	注目した視点	学生の記述した文言
A	子どもへのかかわり方	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人に向き合う ・公平に全員を見る
B	コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの名前を覚える ・自分から話しかける ・理解しようとする ・触れ合うことから理解につなげる ・子どもの目線に立つ ・考えや気持ちを受け止める ・自分を見て欲しいと思っている子ども達に対応する ・受け止めるだけでなく、「こう思う」ということを伝える ・叱るときはしっかり叱る ・見守る ・部活動では見守り理解することが大切 ・一歩引いた視線も大切
C	授業づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの興味を引き出し子どもが主体となる授業
D	家庭環境	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭環境を理解する（親と話せないことの出会いから）

子どもとのかかわりでは、学生の立場から指導の支援をする立場、つまり教師として見られる立場になったことに対する戸惑いが表れている。当初から子どもと向き合いコミュニケーションをとることの大切さを感じているが、次第に親しく触れ合ったり話したりするだけでは、成り立たない指導の場面があることに気づき、子どもたちに対して指導したり注意したりする場面での自分の在り方を感じる学生の報告が多く出てくる。また、指導には、「見守る姿勢」もあることに気づき、その必要性を感じた学生もいる。

授業づくりに関する報告は少ないが、子どものよさや主体性を伸ばす授業についての報告が見られる。

② 教師の仕事

	注目した視点	学生の記述した文言
A	子どもへのかかわり方	<ul style="list-style-type: none"> ・ オンとオフのメリハリ ・ 子どもとの距離感 ・ 叱り方とほめ方
B	指導方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の工夫 ・ 的確な指示 ・ のびのびと過ごせる工夫 ・ 興味関心をひく工夫 ・ 発達段階や理解度に合わせた指導 ・ 生徒の自主性を尊重することが重要 ・ 教えるだけでなく、自ら考える力を養わせる手助け ・ 教材研究の必要性（社会科の授業から学んだこと）
C	教師間の連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全ての仕事に誇りを持つこと ・ 体験学習等での教師の役割とチームワーク ・ 教師間の連携が大切
D	仕事の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 激務 ・ 仕事が多い ・ 大変 ・ 苦勞が多い ・ やりがいがある ・ 子どもの見本 ・ 枠がなく子どもと生活する中で仕事生まれる ・ 型がなく日々学びの連続 ・ ノートを見てコメントを書く ・ 子どもの異変に気づくことが大切

「子どもへの理解」の項目と同様、子どもへのかかわり方に注目する面がこの項目でも見られる。ある学生が、「子どもとの距離感がむずかしい」と話していたため、「子どもへの指導が通じるためには何が大切か」と投げかけたところ、「教育インターンシップ」以後もこのことを課題にしながら活動していた。

指導方法では、「授業の工夫」という大まかな捉え方による文言から「教材研究の必要性」のように実際の授業内容と結びつく文言があり、捉え方の程度が個人によって異なることが見えてくる。

教師の仕事については、「仕事が多い」「大変」という報告が多く記述されている。「教育インターンシップ」に入る前に予想していたものとは大きく異なることが分かる。

学校現場における激務の様子から、ある学生は、『「激務なのになぜ続けられるか」と教師に聞いたところ、教師から『私を必要としている子どもがいるから』と言葉が返ってきた。』と書き、さらに「子どもに必要とされ、子どもの心に宿り、支えとなる教師になりたい。」と書いている。

③ 学校という場

	注目した視点	学生の記述した文言
A	子どもの学びの場 子どもを育てる場	<ul style="list-style-type: none"> ・知識を学ぶ場 ・子どもの成長の場（環境・友達関係・地域との関係） ・人として成長させる場 ・人間性を育てる場 ・教師が子どもの居場所を確保し守りながら教育する場
B	学び合いの場	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士が協力する場 ・友達と一緒に楽しいと感じる場 ・人間関係を学ぶ場 ・子どもとともに作り上げる場 ・教師も子どもから学ぶ ・集団生活を通して人間関係を学ぶ場 ・子ども同士、教師同士、子どもと教師が関わる場 ・心の教育、社会性を学び伝統を受け継ぐ場 ・様々な人が集まる場
C	学校と関わる人の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・技術員さんからの学び ・保護者や地域の人の協力
D	「学校」について持ったイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔あふれて元気がもらえる場所 ・不思議な場所 ・昔と比べると険悪なもの

「学校という場」については、「子どもの学び」「子どもを育てる」「学び合い」という視点にかかわる報告が多い。「知識を学ぶ」というものから、「人間性、社会性を育てる」というものまであり、特に、後者は現場の先生や子どもの姿をもとに記述していることが伝わってくる。

また、学校現場で「技術員さん」「保護者」「地域の人」など様々な人と出会い、そこから学び取った報告もある。学校現場は多くの人に支えられていること、様々な仕事があって成り立っていることを感じ、報告している。

「学校」について、「教育インターンシップ」の活動を通して「学校が好きと感じた。」と報告した学生がいたが、反対に、「険悪なものになっている」と表現した学生もいる。ここでも学校に持つイメージも様々であり、大学側としてここからどう支援するか、考える必要がある。ある学生は、「たくさんの個性を持った子どもがいるから問題が起きるのは当たり前で、みんなが解決したり進んでいく方法をみつけ、人としての基盤を作り出すことのできる空間である」と報告し、学校現場の課題とそれを解決するかに視点をあて記述している。


それぞれの項目は学生一人一人の振り返りであり、個別の文言としてとらえなければならない。つまり、この報告を総体として見た時は、様々な視点に目が向いているようにとれるが、一人一人の課題は狭い視点であるということである。


前掲拙稿でも述べたように、「学生の学びの充実を総体として見るのではなく、一人一人を見ていくと、必ずしも学びが充実したとは言えない実態もある。」のであり、学生一人一人の課題に合わせた対応を考えるとともに、共に考えを伝え、学び合う共同体としての人間開発学部学生の学びの充実と連携の視点に力を入れる必要がある。


3-3 一期生の聞き取りから見られる学び・成長

ここでは、一期生の聞き取りから見られる学び・成長について述べたい。社会体験的な実習を「教育インターンシップ」からスタートさせ、そこからどのように教職に就くまでの過程を経たのか。つまり、社会体験的な実習を通しての学びと課題を捉えるために、現在教育現場で子どもたちを指導する一期生への聞き取りを行った。

一期生への質問は、「教育インターンシップ、教育ボランティアの経験を通しての学びと課題が、教職に就くまでの自分、教職に就いてからの自分にどうつながっているか。どう影響しているか。」である。下記はその聞き取り結果をまとめたものである。

一期生	インターンシップ ① ボランティア ② 平成25年度勤務校 勤	聞き取った内容
Y教諭 	①公立A小学校 ②公立F小学校 ③公立H小学校 勤公立H小学校	<p>A：対照的な学級に入ったことが経験になっている。始めに、3年生のクラスに入り、担任の先生の子どもの関わりに自信のない様子が、子どもに伝わっているのか、子ども達が先生に対し非難するような言葉を発していた。先生の指導もネガティブな雰囲気になり、後に休職された。2年生のクラスは、先生が常に笑顔で子どもの意見を尊重する。「やってみようか。」と自主的な活動の機会を与える言葉かけが印象的であった。子どもは生き生きと活動し先生のことが「好き」という雰囲気があふれ、担任も子どもも笑顔が印象的なクラスだった。</p> <p>A'：今の自分は、ほめることを大切にしたい、指導するべきことは指導するが、いけないことをしてもその子なりの理由がある、ということを忘れないようにしたいと思っている。3年生のクラスで、先生がひたすら叱っている状態のときに、子どもは「理由があったんだ。」と話していた。当時、叱ることだったのか、叱るべきポイントは何なのか、と感じた。今、ほめることを大切にしたいと感じている。自主的に活動を与えることによってのびのびと生き生きと教師も子どもも笑顔になれるようになるということを、伝えていき、いい雰囲気の学習ができるようにしたい。</p> <p>B：教育インターンシップの頃の事をあらためて考えると、教師の指導法や授業づくりや学級経営を見ることも大切だったが、その当時は子どもと向き合うことが新鮮だった。大学で講義を聞いていても経験できなかったことと出会えた。教育インターンシップを通して、それまでに学生である自分の身の回りにいなかった子ども達、外国につながる子ども達や特別支援級の子ども達、一人一人とかがかわれることが新鮮だった。</p>

<p>I 教諭</p> 	<p>①公立 U 小学校 困公立 F 小学校 勤公立 A 小学校</p>	<p>A:今、クラスの児童の学力の差について考えている。M先生は、違う問題に対しても一人一人対応していた。今、同じ教室の中に、めあてもひらがなも書けずにいる子もいれば、5分で全ての問題を解ける子もいる。今のままの学習の進め方でよいのかと考えている。</p> <p>A': M先生の子どもの変容をメモする、1日1日の成長を見逃さないように、例えば、「ひき算の繰り下がりの計算が出来た」というようなスモールステップを作りながら子どもを見取る、というような例を思い出しながら、やっていきたいと考えている。</p> <p>B: 教室環境づくりについては、M先生は、子どもが帰ってから必ず清掃していた。子ども達が清掃時間に掃除をしても。当時、自分も、子ども達にとっても気持ちのよいことだと感じた。自分も今続けている。</p> <p>C: 学生時代、ズーラシアへの遠足の引率を経験した。その時は、特に目的をもたずに行ったが、今年のズーラシア遠足には、目的を持っていくようにした。国語の動物園の獣医さんを紹介する授業と関連付け、「飼育の仕事を1年生に伝えよう」という目的を持って行った。目的意識を持つと子どもたちの動きが変わる。遠足の行事と学習とを結びつけることの大切さを感じた。</p> <p>D: 学生時代宿泊体験学習を2回経験した。1回目は、先生方の連携を感じたが、2回目は、連絡がいきわたらないことがあり、キャンドルファイヤーがスムーズに進行できなかった。今は、少人数の学校なので、連携しないと成り立たない。普段の生活でも、自分から声をかけたり、プリントを他のクラスの分も用意したり、小さいことでも必ず報告したり、よいことを伝えたりと、報告について考えている。</p>
--	--	--

<p>S 教諭</p> 	<p>④ 公立 N 小学校 困 公立 N 小学校 困 公立 M 小学校 困 公立 F 小学校 勤 公立 K 小学校</p>	<p>A：中学校での教育インターンシップでは、先生として立つとはこういうことだと体感的に感じた。個別支援級の子どものを見ていくうちに、憧れで来たが、責任も問われるし、軽い気持ちではいけないと感じた。慣れてくると、先生や子どもたちとコミュニケーションがとれるようになった。</p> <p>A'：中学校での教育インターンシップの経験（中学校では定期的に行くことができなかった）から、「小学校に行こう」と思い、小学校での教育ボランティア活動を始めた。N小学校では、定期的に通い、個別支援級の先生方が子どものことを考えて指導を工夫したり、一人一人に応じた場所で学習していたりした。子どもへの指導は言葉で通じることもあり、「いけない」ことは「いけない」ととめる場面もあり、「子どもの様子をしっかり見てから」対応するという子どもへの支援の仕方が分かってきた。</p> <p>A''：M小学校の活動を始めてから、学校によって特色が違うことが分かった。1～6年生に入り、学校の中でも一人一人の先生方の指導の違いに気づいた。優しい雰囲気クラスと厳しい雰囲気クラスなど。ほめるときは「ここがよかったね。」など、ほめ方についても学んだ。学級が違って先生同士つながっていて、学年のまとまりもあると感じた。</p> <p>B：「体育の勉強をしたい」と思い、K先生に相談すると、「〇〇先生の授業はいいよ。」「〇〇先生は研究しているよ。」と情報をくださった。K先生の教室は温かい雰囲気子どもたちもすぐ受け入れてくれた。学習では、子どもたちは、ノートを隠すことなく、「考えを聞いてみよう」という先生の指導が伝わっていた。「いいことを見つけ、考えよう」「自分だったらどうするか考えよう」など、子どもたちは考える場面を大切にしていた。</p> <p>B'：現在、先生同士のつながりを大切にしようとしている。「〇〇さんはどう思っているの?」と聞く前に、自分の考えを持ち、自分の考えを言ってから聞くという学び方を身につけることが出来た。</p> <p>C：教育インターンシップやボランティアのときに、もっと授業の組み立てをしっかりと見ておくべきだったと感じている。実際に学校現場に入ってから、なかなか見えない状況がある。</p>
---	---	--

小学校での教育インターンシップで対照的な学級に入った経験から学び、子どもの自主的な活動の姿をめざしながら自分の教師としての姿勢を確立しようとしているY教諭。教育インターンシップでお世話になったM教諭の個に応じた指導や環境作り、体験活動やたてわりの学習から学んだことを、現在の実践に生かそうとしているI教諭。中学校での教育インターンシップから始まり、小学校教育ボランティアの必要性を感じ、2校での経験から教科の指導法や人のつながりからも学んだS教諭。

3名の一期生の聞き取りから、それぞれの教育インターンシップの経験の違いとそこから進んだ道の違い、経験から学んだことを現在の自分に活かしている内容が豊富であり充実していること、等が読み取れる。今後、「教育インターンシップ」のどの経験がどのように生かされたかを分析する必要性を感じている。

4. 考察

4-1 4年間の成果と課題

社会的な演習・実践等を通した大学と地域社会の連携による「共育」の実践について、「教育インターンシップ」の状況と「教育インターンシップ」を経験した学生の学びを中心に見てきた。地域の教育関係機関との連携、「共育」における学生の学びは、4年間を通して深まる方向にあり、現在就職に就いている一期生の活躍も期待される。

4年間の成果と課題については、前掲拙稿で次の4点を挙げた。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①「学生自身の活動から生まれた学校との信頼関係」②「先生方、子どもたち、教育関係者からの学びの充実」③「地域教育関係機関との連携の広がりと充実」④「入学から卒業までの段階に合わせた大学の組織・体制作り（学生の取組の見通しの明確化）」 |
|---|

①については、前掲拙稿でも述べたように、学生の姿勢や活動の実績から受け入れの希望校も多くなり、その積み重ねられた信頼関係によって、教育インターンシップからの継続の活動を希望する学校が増加している。

②については、活動記録やレポート、一期生の聞き取り内容からも、実際に教育現場の体験を通して動き、感じ、どう行動するか、自分で判断する状況が見られた。平成25年度採用試験に向けてもたくさんの受け入れ校の先生方から教員採用に向けてのご指導もいただいた。

③については、それぞれの地域の教育委員会の教員養成の取り組み（東京都－教師養成塾、横浜市－AT、アイカレッジ、川崎市－支援員、神奈川県－スクールライフサポーター、ティーチャーズカレッジ、千葉県・市－たまごプロジェクト）等にかかわる学生の参加人数が増加している。地域の教育委員会の取り組みや各地域の教員採用試験については、現に学生が関わっている状況から、各地域の特色が見えてくる。その特色を的確にとらえ、学生の学びに生かす方策を考えていく必要がある。

④については、入学からそれぞれの段階に合わせた大学の組織・体制作りを行うとともに、それぞれの学生の取り組みに見通しをもてるよう指導していく必要がある。

本稿の「教育インターンシップ」活動記録やレポート、一期生の聞き取り内容の分析、①から④の課題とをかかわらせるならば、次の2点について考えていく必要がある。

一点目は、「教育機関や教師からの要請の地域による違いや特性の問題」であり、もう一点は、「学生の個性の生かし方の問題」である。

4-2 「教育機関や教師からの要請の地域による違いや特性の問題」と「学生の個性の活かし方の問題」から

前掲拙稿では、「教育インターンシップ」受け入れ校の要望が、「学校現場が必要としている人的支援と直接結び付くような要望」(平成22年度)、「活動や体験を通して学生に身につけて欲しいことや学んでほしいことについての具体的な要望」(23年度)、「子どもを育てる視点に立った表現が多く見られる要望」(24年度)と変化していることを述べた。

このように「教育インターンシップ」における要望が学校により異なること、また、それぞれの学生の出会う内容や場が異なること、その出会いからの学生の感想や学びが異なること等が、学校現場の状況として見られる。例えば、学級や子どもたちの「よい状況」と出会い、「授業がスムーズに終わってよかった。」と振り返る学生と「先生の指導で子どもたちが変わってよかった。」と振り返る学生がいる。また、「よくない状況」と出会い、「学んでもつらいだけ。意味があるのか。」と振り返る学生と、「先生の指導場面を見て、自分は子どもとどうするか考えた。」と振り返る学生もいる。

さらに、教員採用試験ともかかわる教育委員会等の要望も各地域によって異なるのである。その中で学生の個性を生かし、それぞれが教職に向けて動き出すことができるようにするためにはどのような体制が必要であろうか。

「教育インターンシップ」での学びを生かすためには、学生一人一人の課題に合わせた教育実践総合センターの支援を充実させるとともに、学生自身が実感した学びの交流を図る情報交換の場を充実させた「共同」「連携」の視点に力を入れる必要がある。学生の出会う場は様々であり、その学びも様々であるならば、交流の場や情報交換の場を通して学びを深めることができると考える。

また、「教育インターンシップ」や教育ボランティア、「教育実習」、教員採用試験を経て教職に就くまでの過程において、学生の個性を生かすためには、入学時からそれぞれの段階に合わせた大学の組織・体制作りを行う必要がある。一期生の学びや進み方に見られた個人差と広がりから考えても、学生一人一人の個性を生かすことのできる大学の組織・体制作りを行う必要があると考える。

教育実践総合センターとして、教育インターンシップを通してその目標の「学校等に身を置くことで、教育に対する実践的理解を図り、教職へ向けた学びの展望を得る。」ことから、次のステップへとつなげる体制を探っていきたい。

そして、子どもから学び、教師から学び、人のつながりから学び、経験から学ぶという姿勢を身につけ、その学びをもとに、自分で判断し問題解決する力をつけてほしいと願っている。

註

- 註1)人間開発学部ガイドブック 平成25年4月 國學院大學人間開発学部教務委員会 P 2
- 2)『「共育」における学生の学びの実態と課題～地域と連携した学びの共同体づくりに向けて』((2013.1)
- 3)人間開発学部ガイドブック 平成25年4月 國學院大學人間開発学部教務委員会 P 3
- 4)教育実践総合センターだより「思ひ草」9号
平成24年12月17日 國學院大學人間開発学部教育実践総合センター P 3
- 5)教育実践総合センターだより「思ひ草」9号
平成24年12月17日 國學院大學人間開発学部教育実践総合センター P 3
- 6)教育実践総合センターだより「思ひ草」5号
平成23年7月20日 國學院大學人間開発学部教育実践総合センター P 3
- 7)教育実践総合センターだより「思ひ草」7号
平成24年2月29日 國學院大學人間開発学部教育実践総合センター P 3
- 8)教育実践総合センターだより「思ひ草」11号
平成25年7月5日 國學院大學人間開発学部教育実践総合センター P 3

(おがさわらゆうこ 國學院大學人間開発学部教育実践総合センター専門研究員)